

D. リースマンの社会的性格について、 「飢餓の恐怖」という視点からの再検討

浦 上 博 達

目 次

序

1. リースマンによる社会的性格の三類型，および方法論的分析と目的論的分析の区別
2. 社会的性格について
3. 社会的性格の背景
 - 〔1〕 「生産の時代」
 - (イ) 「生産力水準が所与とされていた時代」
 - (ロ) 「生産力の発展に積極的であった時代」
 - 〔2〕 「消費の時代」

覚書き

序

本論文の目的は、「およそ社会科学において、理論が形成されていくさいには、つねに一定の人間類型が前提されていた。」¹⁾ という問題意識の下で、リースマン (D. Riesman) が社会的性格として鮮やかに描き出した三つの人間類型を再検討し、それらと経済的な環境との対応関係についてひとつの仮説を提出することにある²⁾。

その要旨を整理すれば、次の通りである。

1. 類型的手法に基づいて、リースマンは社会的性格について三つの型——伝統志向型・内的志向型・他人志向型³⁾——を描いたが、それは、すぐれた人間類型の表現である。

2. ところで、リースマンは、それぞれの社会的性格が社会を形成する同調様式の相違から生じると主張するが、しかしながらそれぞれの社会の経済的環境に制約された社会的な目的の類型化がそれぞれの同調様式に先立つのである。つまり、同調様式による社会的性格の類型化という方法論的分析は、ある社会にはそのときの経済的環境により特有の社会的な目的が発生し、その目的による類型化という目的論的分析に従う。
3. このような目的論的分析によってこそ、社会的性格の社会に対する意味と、それぞれの社会的性格に対応する歴史的な社会の状態が明確になる。
4. この対応関係の直接的な歴史的対応物は、リースマンの主張する如く「人口」ではなく、心理的な「飢餓の恐怖」であり、間接的なそれは、物的な「生産力」である。
5. その対応関係については（これが本論文の主旨である）、次の通りである。

まず、歴史を段階的に、「飢餓の恐怖が支配する社会」と「飢餓の恐怖から解放された社会」に二分し、前者をさらに「生産力の発展がほぼ限定されていた社会」と「生産力の発展の可能性が意識された社会」に細分すると、伝統志向型は、「飢餓の恐怖が支配ししかも生産力の発展がほぼ限定されていた社会」に対応し、内的志向型は、「飢餓の恐怖が支配するがしかし生産力の発展の可能性が意識された社会」に対応し、他人志向型は、「飢餓の恐怖から解放された社会」に対応する。

注 1) 大塚久雄 [17] 217頁。

2) 本論文の意図するところは、経済社会の発展の因果的分析でもなければ況して発展過程そのものを述べることでもない。ただ、歴史を観る特別な観点とその下での人間類型の対応関係についての仮説を設定したにすぎない。

3) Riesman [18], 佐々木 [20], 加藤 [19], (但し、本論文では、訳語及び引用は必ずしも訳書に依っていない場合がある。)

1. リースマンによる社会的性格の三類型、および方法論的分析と目的論的分析の区別

まず、リースマンによるそれぞれの社会的性格の類型を要約しておこう。

a) **伝統志向型** 「……個人の〔社会的な〕¹⁾同調性は、ある特定の年齢集団、氏族、カーストの集団の一員としての同調性というかたちをとる。かれは、過去何世紀にもわたってせいぜいほんの少ししか修正をうけずつづいてきた行動様式を理解し、それに満足することを学びとる。そこでは生活のなかでの重要な関係は、たぶん、注意深く、かつ厳格なエチケットで統制されており、成年に達するまでの激しい社会化の時期である子供時代に教えこまれる。さらに、この文化は、その経済的な仕事に加えて、あるいはその一部として、すべての人を支配し、方向性を与えるために儀式や日常的習慣や宗教を用意している。」²⁾

すなわち、この類型の本質は、社会³⁾を成立させる同調性の様式が、伝統に従うという型をとるのである。そこでリースマンは次のように述べた。

「伝統志向が同調性の基本様式であるような社会では、一般的に観察可能なことばや行為、すなわち行動の領域で厳密に同調性をたもつ、ということに力点がかけられていた。そこでは儀式とかエチケットとかいうかたちで客観化されたこれらのきまりを守るためには、性格における個性はあまり必要ではない。必要なのは、こうした行動面での注意と服従をおこなうことのできる社会的性格なのである。」⁴⁾

1) 以下、[]は筆者挿入。

2) Riesman [18] p. 11, 加藤 [19] 9頁。

3) 「社会」という概念は本来ならば厳密に規定されなければならないが、それは、今の私の能力を越えるものなので、さしあたり本論文では、「社会」という言葉は、広義では「社会全体」を意味し、狭義では「ある特定な集団」を意味するものとする。つまり、本論文での「社会」は単なる用語上の使用であって、概念規定は避けている。このことのために、本論文に重大な欠陥が生じることは充分予想されることであるが、それは今後の課題としたい。

4) Riesman [18] p. 15, 加藤 [19] 12頁。

ここで留意しなければならないことは、以下このようにしてリースマンは、社会を成立させる同調性の観点から社会的性格を類型化することである。このような類型化は、「同調様式」という方法論的観点に基づいたものであるから

方法論的分析と呼ぶとすれば、目的の類別の観点から類型化を行なう手法は、目的論的分析と呼ぶことができよう。そこで私は、社会的性格は目的論的分析でもって類型化される必要があると考える。つまり社会を成立させる同調様式という概念は、それ自身の内に「同一の目的を志向する」という性質が含まれているのである。何故ならば、異なる目的、極端な例をとれば相対立する目的の下では同調様式は存在せず、社会が成立しない可能性¹⁾があるからである。そこでとりもなおさず同調様式による方法論的分析は、その社会で一般的にどのような目的が共通の目的として志向されているか、という観点からの類型化による目的論的分析に従うことになるのである。そして、このような目的論的分析からこそ本論文の主旨が導かれる。

- 1) 「可能性」というのは、人間の内的な性質を帯びている「同調様式」が存在しなくても、全く強制的な外的圧力でもって社会が成立する可能性があるからである。しかしながら本論文及びリースマンも「同調様式」の概念規定の内に、人間の内的な性質を含めているのでそのような社会は考慮外とする。

そこでこのような分析手法の下でこの伝統志向型をとらえるならば、伝統志向型の社会的性格が支配的にみられる¹⁾人々にとっては、「伝統」そのものが達成すべき目的であると考えられており、その目的を獲得するための方法がとりもなおさず伝統に従うことであつたのである。(何故、「伝統に従うこと」が目的とされたのか、という理由については、3—[1]—(i)で取り上げる。)

- 1) 「支配的にみられる」という用語は、以下の叙述で個人及び社会の両次元で用いられるが、両者共、諸々の社会的性格が併存する内で「特に顕著に」という意味である。

b) 内的志向型 「個人の〔社会的な〕方向づけの起動力なるものが、年長者によって幼少期の頃うえつけられ、しかも一般化されてはいるがそれにもかかわらず逃げることのできない宿命づけられた目的に向けられているという意味で“内的”である。」¹⁾ そして「一次集団—すなわち、子供達を社会化し、かつその初期経験によって大人達をも規制する諸集団—の規制がゆるむにしたがつて、より開かれた社会に適合するような、新しい心理的メカニズムが発明される。そのメカニズムをわたしは、心理的ジャイロスコープ (gyroscope—羅針

盤) というふうに表現してみたい。このジャイロスコープ装置は、両親や権威によって個人のなかに据えつけられるやいなや、その内的志向の個人を“針路上”にのせておく役割を果たす。そこでは、伝統が立ちほだかっても、かれは意に介せず、針路をくずさない。内的志向の人間は、かれの生活目標が要求するものと、外的な環境からの衝撃とのあいだのバランスを上手にとることができるのである。(中略)

〔しかし〕かれは、ジャイロスコープの許容する機動力の範囲内で、外界からの信号を受信し、それを利用することもできるのである。かれのジャイロスコープの矯正装置は自動型ではないのである。』²⁾

1) Riesman [18] p. 15, 加藤 [19] 12頁。

2) Riesman [18] p. 16, 加藤 [19] 13頁。

リースマンによる内的志向型の定義は以上のようなものであるが、それに関してここで暫く以下の二点について吟味を加えておく。

まず第一は、個人の方向づけの起動力を植えつけるものについてである。

リースマンによれば、それは、ときには一般的な権威者や年長者であり、またしばしば具体的に両親である。しかしながらそうであるならば、その当事者自身の社会的性格に関して素朴な疑問が残る。

かれらがある外生的でしかも劇的な変化、例えば宗教改革のような出来事に直接遭遇した人々であるならば、旧来の社会的性格(それは、伝統志向型である)からの脱皮は明白であり、かれらのその変化した新たな社会的性格(それは、内的志向型である)を創りだした宗教的信念を、かれらの社会的性格と伴に幼年者に方向づけの起動力として植えつけることができたであろう。しかしながら自ら宗教改革運動を牽引していった人々、あるいは既にそのような宗教的改心を内生的に感じており宗教改革運動に同調できた人々の社会的性格は、果たして誰によって植えつけられたのであろうか。つまり論理的な言い方をすれば、伝統社会¹⁾の中で育った人々であるならば、かれらの社会的性格もまた伝統志向型の性格として、かれらはその幼年時代に修養していったであろうし、それならば必然的にかれらがまた幼年者達に植えつけることのできる社会的性格も、また伝

統志向型になるのではないか、という問である。このような循環論法的な問題の解決には、環境に対して時間の経過に伴う漸次的な変化という意味での進化論的な思考の次元が必要である。すなわち、伝統社会に育ちそこで生活している人達も、環境一特に経済的環境一の変化に応じて内面的な変化が徐々にではあるが生じる（個人の次元においては、時には“天啓”と呼ばれる如く急激な変化が生じる場合もあるが、しかしそこに至るまでには、旧来の事物に疑問を感じる微小ではあるが長い思考の蓄積があったであろう）。けれども依然として、かれらの生活に現われる外面的な行動は、やはり伝統社会での社会的性格である伝統志向型の様相を帯びている筈である。しかしおそらく内面的な変化を感じている人々は、そのような変化を社会に対しては見せなくても、かれらの接する幼年者に対して見せ始めたかもしれない。いな、かれらがたとえ積極的にそのような変化を幼年者に植えつげなかつたとしても、いまや戸惑いのかれらは最早伝統志向の態度を毅然たる確信でもって示すことはできなかつたであろう²⁾。そこで幼年者達は、そのような年長者の戸惑いの態度をみて、環境の変化に応じて年長者の変化した内面的なものを嗅ぎとったかもしれない³⁾。また幼年者達に社会的な行動の起動力を植えつけるものは、人間だけであるとは限らない。確固たる態度のとれない身近な年長者あるいはその裏返しである旧来の社会的性格を強圧的に示す身近な年長者に反抗すると同時に、第三者による何らかの情報、特に冒険談や立身出世談あるいは啓蒙的な知識またはそれらに類する出版物は幼年者達の心を湧き踊らせ、自ら新たな社会的性格を形成していったであろう。

- 1) この「伝統社会」という用語は、議論の先取りではあるが、伝統志向型の社会的性格が支配的な社会という定義であり、その逆ではない。また伝統志向型は、内的志向型に歴史的に先行すると私は考えている。
- 2) 本論文92頁のリースマンの引用句を参照。
- 3) 「子供は周囲の大人が意識的に教えたことのみを学ぶと信ずるのは多くの成人が往々にして陥るところの誤謬である。事実子供は大人が教えなかつたこと、知られることを避けていたことをも学ぶものであり、それによって自己を充たすものである。大人の或る行動と他の行動との間に介在する矛盾もこれを見る子供の注意を惹き、大人の無意識的な行動も或は子供によって模倣され或は反撥を受ける。」（清水 [28] 34頁。）

次いで考察すべき第二の点は、社会への同調様式についての目的論的な分析である。リースマンは内的志向型の社会への同調性の存在について次のように述べている。

「……社会的性格のもつ同調性は、人生の初期において内化されたある一組の目標を得ようとする傾向によって保証される。」¹⁾

しかしこれだけで社会が形成・維持されるという保証になるであろうか。そこでリースマンは、社会への同調性が存在することを保証するために、前述(90頁)のように、「一般〔的な〕……目的」とか「かれのジャイロスコープの矯正装置は自動型ではないのである」と述べておかなければならなかったであろう。しかしそれでもなお各人のジャイロスコープの方向が一致していなければ、社会は成立・維持できない可能性が残る。リースマンは、内的志向型の支配的な社会が実際に形成・維持していたと想定しているし²⁾ (もし、そうでなければ、論理的にも内的志向型の概念分析が無意味なものとなる)、事実、存在していたと思われる。とするならば、同調性の存在を保証する同一の目的が存在しなければならぬ。

1) Riesman [18] p. 8, 加藤 [19] 7頁。

2) 「西洋史のなかで、ルネサンスと宗教改革とともに出現し、かつ、いまや消え去ろうとしている社会は、内的志向を同調性の主要原理とする社会の具体例である。」(Riesman [18] p. 14, 加藤 [19] 12頁。)

後に(3—〔1〕—(ロ))で詳述することになるが、ジャイロスコープの方向は、「生産の時代」における「富の成功」¹⁾という宝島に向けられていたのである。ただ、その島々の地理的位置やその具体的な姿はさまざまであり、その上たとえ同一の島が目的になっていたとしてもそれへの航路は種々雑多であった。特にこの未知の航路の発見が「富の成功」において重要であったのである(これは単に比喩的ではなく、事実、新航路の発見が歴大な富を齎した時代もあった)。

つまり内的志向型の支配的な社会における社会への同調性の存在は、「富の成功」という「一般的」な社会的目的の存在によって保証されていたのである。

1) そして一般的に、「富の成功」の主役達は当時の中産階級(この定義はそれ程

明確ではないが)であった。つまり、「……、一見目立たないが、しかしこうした経済生活における新しい精神の貫徹にとって決定的な変化を生ぜしめたのは、通常、経済史上どの時代にも見られる命知らずの厚顔な投機業者や冒険企業家、或いは端的に『大資本家』(grosse Geldleute)ではなくて、むしろ厳格な生活の訓練のもとに成長して、厳密に市民的な物の見方と『原理』を身につけて打算と冒険を兼ね併せ、とりわけ生真面目にまたたゆみなく綿密にまた徹底的に物事に打ちこんでいく人々だったのである。」(ウェーバー [30] (上) 78頁。)

次に引用するリースマンの言葉も、そのような観点から読まれるべきであろう。

「まったく新しい種類の状況が沢山出現しており、それらの状況は、既存のきまりに従って予断することをゆるさない性質のものだ。したがって、個人的な選択の問題は、……剛置でしかもかなり個性化された性格によって解決される。」¹⁾

1) Riesman [18] p.15, 加藤 [19] 12頁。

ここで、次に述べる他人志向型という概念に関連して留意しておかなければならない重要な点がある。それは、内的志向型におけるジャイロスコープの修正は、「富の成功」という目的に対する物的(この場合、人間的環境も物象化される)な状況により強要されるのであり、「他の人間への関心」ということはほとんどその航路の修正に影響を与えない、ことである。寧ろ「他の人間への関心」を払わないことにすら、この内的志向型の特徴がある。

c) **他人志向型** 「他人志向型に共通するのは、個人の方向づけを決定するのが同時代人であるということだ。この同時代人は、かれの直接の知りあいであることもあろうし、また友人やマス・メディアを通じて間接的に知っている人物であってもかまわない。同時代人を人生の指導原理にするということは幼児期からうえつけられているから、その意味では、この原理は“内面化”されている。他人志向型の人間がめざす目標は、同時代人の導くがままに変わる。かれの生涯を通じて変わらないのは、こうした努力の過程そのものと、他人からの信号にたえず細心の注意を払うという過程である。」¹⁾ 「この段階では、外部の他者たちの期待と好みに敏感である傾向によって〔社会への〕同調性が保

証されるような社会的性格」²⁾が生じる。そして「どんな人も、それぞれの時代でときには誰か他の人々に好かれようと思ったり、その必要があったかもしれないが、ただ現代の他人志向型〔の人々〕こそが、このようなことを方向性の主要な源泉にし、また感受性を主にそそぐ対象にしている。」³⁾そこで「他人志向型の人間のもっている一番重要な心理的レバーは、不定的な“不安”なのである。この制御装置は、ジャイロスコープなのではなく、レーダー (radar) にたとえるのが、適切であろう。」⁴⁾

- 1) Riesman [18] p. 21, 加藤 [19] 17頁。
- 2) Riesman [18] p. 8, 加藤 [19] 7頁。
- 3) Riesman [18] p. 22, 加藤 [19] 18頁。
- 4) Riesman [18] p. 25, 加藤 [19] 21頁。

リースマンによる他人志向型の定義は以上のようなものであるが、やはりここで方法論的分析と目的論的分析による区別を示しておく。

リースマンは、他人志向型の人間が持つ行動目的を決定づけるものとして「同時代人」に強調点を置いており、そこで方法論的分析の視点から同調様式を「〔同時代人である〕他者たちの期待と好み」に対する感応性に求めている。しかしながら目的論的分析からするならば、他人志向型の人間にとっては、「他人に対する関心そのもの」、別の言い方をすれば「他人の心を得る」ことこそが窮極の目的であって、「他者たちの期待と好みに敏感」であるのは、「他人の心を得る」ための手段にすぎないのである。つまり他人志向型の人間にあっては、「他人の心を得る」という同一の社会的目的が設定されているからこそ同調様式の存在が保証されるのである。

2. 社会的性格について

一般に、人間の性格についての論争は、経済分析を専攻する者にとっては窺い知らざる深いものがあるが、リースマンは社会的性格について次のように述べている。

「“社会的性格”とは、性格の一部であり、さまざまな重要な集団に共通で、

かつ、現代の社会科学者の多くがいうように、それらの諸集団の経験から生まれたものなのである。このような社会的性格の概念によって、私が本書を通じて論じているように、さまざまな階級、集団、地域、国家の性格について論じることが出来るようになる。」¹⁾ 社会的性格についてのこのような定義は、「集団」及び「性格」についての概念が明確でないために不明確なものであるが、ここでは便宜上リースマンの用語法に従い、「社会的性格とは、社会的な集団のなかで共通してみられる性格を意味する」ものとして用いる²⁾。勿論、現実の社会的な集団が共有している性格は必ずしも統一的な姿を見せているのではない。またなんらかの共有している性格が見受けられたとしてもその集団の各構成員が常に整合的な行動を行なっているというわけでもない。社会的性格について述べる場合には、典型的な分類方法を採用しているのであり、その社会的性格の下での行動について述べる場合には、しばしばそのような行動の傾向を示す、という意味である。こうした用語法で社会的性格を述べれば、それは、ある社会集団を構成する心理的な同調様式にほかならないのである³⁾。

1) Riesman [18] p.4, 加藤 [19] 4頁。

2) 本論文, 89頁の「社会」についての注(1)も参照。

3) 「わたしは、ここでは“同調性の様式”という言葉が社会的性格と同義のものとして用いたい。」(Riesman [18] p.6, 加藤 [19] 5頁。)

集団の形成・維持・変容のそれぞれと同調様式との関連については、次の文を引用しておこう。

「……, 社会集団はその規模の大小と構造の如何とに論なく、何れも究極に於いては人間の行動を以て成るものであって、一定の様式の下に立つ人間の行動を除いて社会集団を考えることは終に不可能である。社会集団の輪廓が明瞭であり鞏固であるとしても、特定の秩序例えば或る習慣に従う人間の行動を離れて明瞭且つ鞏固な輪廓があるのではない。輪廓は人間行動それ自身の輪廓であって、行動の方向が変ずれば、輪廓もまた自らその姿を変ぜざるを得ない。人間は社会の統制を受けつつ生活することによって、逆に社会を一定の形態に於いて支えるのである。人間は社会から自己を生かす道としての行動様式を学

びつつ、而も翻ってその採用を通じて社会を存立せしめて行くものである。人間は社会によってのみ生きることが出来ると同時に、人間のみが社会を生かして行くのである。」¹⁾

この引用文では社会集団と個人の行動の相互関連性が述べられているが、その相互関連の連鎖をより明示的に示すことは、未だ解決を見ない歴史的な課題である。ただ、社会集団の形成・維持は、同調性の存在を前提とすること、つまり社会集団の限界概念²⁾は同調様式にあることは明白である。それは、一方では社会集団がその構成員たる個人にその社会集団のもつ同調様式を強要するが、他方では構成員である個々人の同調様式がその社会集団の限界的な性格になるからである。

1) 清水 [28] 91—92頁。

2) 「集団の限界概念」とは、ある特定の集団が、それを欠くと最早その特定の集団としては成立しえないような概念のことである。

ところでリースマンは、社会的性格についての深い議論を避けているが、しかし次のようなリースマンの問いかけ¹⁾に答えることこそが、社会的性格と社会との相互関連を解き明かす一助にもなるであろう。

- (1) 社会的性格は、遺伝よりも寧ろ経験に基づいているかどうか。
- (2) 社会的性格が、現実に存在するという実証的な証拠があるのかどうか。
- (3) 社会的性格が、全人類を紐帯するような性格 (character) やパーソナリティ (personality)²⁾よりも、あるいは逆に最も似通っている人からでさえも個々を区別することになる性格やパーソナリティよりも重要であるかどうか。

1) Riesman [18] p. 4, 加藤 [19] 4頁。

2) リースマンが用いている「性格」と「パーソナリティ」の概念規定は明確ではないので、ここではそれらを、人々が先験的に有している心理的要因（その内のあるものは人類共通に見られるものもあろうし、また他のあるものは、全く個別的なものもある）として解釈する。そして、そうだとするならば、ここで述べている「性格」や「パーソナリティ」は本来の意味で個人がそれぞれ有している性格である。後にこの問題を検討するときには、このような意味での個人的性格としてそれらを取り扱う。

順次、検討してみよう。

社会的性格が、遺伝よりも経験に基づくものであること、しかもその経験とは実際は外部世界からの強制に基づくものであることを端的に述べている三つの引用文を挙げておく。

まず、エリック・H・エリクソン (Erik H. Erikson) によれば、「幼児期の訓練システムは、……人間という素材から、その部族の特殊な自然的条件と、経済・歴史的な必要に見合った（あるいは、かつて見合っていた）態度の構造的配置をつくり出そうとする無意識的な試みのあらわれである。」¹⁾

- 1) この引用文は、リースマンからの再引用である。Riesman [18] p.5, 加藤 [19] 5頁 (原典は、Erik H. Erikson, "Observations on the Yurok: Childhood and world Image," *University of California Publications in American Archaeology and Ethnology*, XXXV, 1943.)

また、E・フロム (Erick Fromm) によれば、「歴史に残るようないずれの社会においても見られたように、人々は、かれらの意志、独自性そして自発性のある部分を押し殺すという代償を支払いながらかれらの社会的役割に適応させられるということによって、現代のわれわれの社会で機能を果たしているのである。すべての人間はその潜在能力でもって人類全体を表わしている一方、すべての機能している社会は、本来は自己保存に関心があるし、またそうであるべきである¹⁾。ある社会が機能する特有の方法は、歴史的発展の時点において所与である数多くの“客観的”な経済的・政治的要因によって決められる。それぞれの社会は、それに特有な歴史的状況の可能性と制限の内で機能しなければならないのである。いかなる社会も十分に機能するためには、その構成員は、その社会、あるいはその社会の内のある特別な社会層の構成員として行動しなければならないような方法で行動したくなるような性格を持つことになる。かれらは、客観的にかれらがなす必要があることを欲しなければならない。“外的な強制力”は、“内的な強迫”、つまり性格的な特徴となるところの人間のもつ特殊なエネルギーによっておきかえられるのである。個人の利害と社会の利害とが同一化されているという組織化の状態にまで人が達していないならば、

社会の目的は、多少に拘らず個人の自由や自発性を犠牲にすることによって達成されるのである。このような目的は、子供を訓練したり教育したりすることによって遂行される。」²⁾

- 1) このようなフロムの見解が、現代のように人類全体を瞬時に破壊するエネルギーが存在するような時代にも妥当するか否かは、今の私には解らない。
- 2) Fromm [1] pp. 409—410。

またマルクス (K. Marx) の有名な言葉として、「人間は、彼らの生活の社会的生産において、一定の、必然的な、彼らの意志から独立した諸関係に、すなわち、彼らの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係にはいる。これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を形成する。これが実在的土台であり、その上に一つの法律のおよび政治的上部構造が立ち、そしてこの土台に一定の社会的諸意識形態が対応する。物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。」¹⁾

- 1) マルクス [11] 15頁。

それぞれの論者の意味するところを単純に解することは重大な誤りをおかすであろうが、しかしながら上述の引用は、集団が存在するためにはその集団を形成・維持せしめる心理的な同調様式が存在しなければならず、しかもその集団が社会的なものであれば、その集団がどのような社会的な物的環境¹⁾に置かれているかによってその同調様式は強く影響されることを示し、それ故それは、遺伝よりも経験を通じて学習されることを示している。

- 1) 「社会的な物的環境」とは、単なる物的環境と区別したいためであるし、また同時に単なる社会的環境と区別したためでもある。本論文、101頁も参照。

次に、社会的性格が現実存在するかどうか、という間に答えるためには、社会的性格と個人的性格との区別という困難な問題にもう一度逢着することになる。例えば、現実に現われた性格をすべて個人的性格であるとみなすことも可能であろう。しかしながら先の議論からも明らかなように、社会集団が存在するためには、その社会集団を成立させる同調性が存在しなければならず、そ

ここで社会的性格が存在する。何故ならば、「個人」という概念を「社会」集団という概念に対比して捉えるならば、個人的性格は、概念上、社会的性格である同調様式以外のまさに個人としての性格を意味するからである。

すなわち社会的性格が、上述の如く社会集団の形成・維持を目的として経験によって学習される同調様式であるならば、社会集団が実際に存在する限り、実際に社会的性格が存在することになる。しかしながらこのような議論は、実証的というよりは論理的な証拠固めである。

最後に、社会的性格が個人的性格よりも重要な（リースマンの用いている“important”の意味が明白ではないが、ここでは“優先”という意味に解釈する）ものであるかどうかを判定することは、「全体と個」という永遠の論争に足を踏み入れることになる。しかしながら、社会集団の維持という立場に立って眺めるならば、次のような事例はたびたび生じた。社会的性格と“先天的な”個人的性格の対立は、社会的な物的環境の変化を伴っていない限り、しばしば個人的性格が犠牲となって終わり、“後天的”と思われる個人的性格については、その経験の過程で社会的性格に強く影響されるのである。

3. 社会的性格の背景

リースマンは、社会的性格の背景を人口の動向に求めており¹⁾、その人口動向の形態を三つの継起的な段階に分類し、それぞれを先述の三つの社会的性格に照応させるのである。

1) Riesman [18] pp. 7—8, 加藤 [19] 6—7頁。

まず第一の人口動向の形態は、出生率・死亡率の双方共高く、そのため死亡率が低下するようなことが生ずれば、爆発的な人口増加の可能性を秘めているという人口の「高度成長潜在期」である。そしてこのような人口の局面にある社会では、伝統志向型の社会的性格が支配的であったとされる。

次いで第二の人口動向の形態は、それまでの高い水準にあった出生率と死亡率のうちでまず死亡率が低下することによって特徴づけられる局面である。この局面は、その結果として人口の増大を齎すので「過渡的成長期」と呼ばれる。

そしてこの局面では、内的志向型の社会的性格が支配的であったのである。

しかしながら、この人口増加も過渡的成長期と名づけられた如く上昇の一途を辿ることはなかった。出生率の低下という変化が死亡率の低下に追いつき、ときにはそれを越えることにもなった結果として人口の成長率は減退の様相を呈し始めた。この人口動向の新しい局面は、「初期的人口減退」と名づけられる。そしてそれに随伴して、社会的性格もそれまで支配的であった内的志向型とは異なる新しい社会的性格が出現し始め、それを他人志向型と呼ぶのである¹⁾。

- 1) ここで、これらの社会的性格の体现者はどのような集団なのか、という重要な問題が生じる。そしてこのような問題に答えるためには、「階級」についての分析が必要とされる。しかしながら、未だ私にはそこまで踏み込むだけの備えがない。ただ、最後の「覚書き」で多少その問題に触れる程度である。

このようにして、リースマンは社会的性格の三類型を人口動向の三段階と関連づけて述べてはいるが、それらの因果関係を直接明示するような言葉遣いは極力避けているように思われる。序文の中¹⁾で、人口曲線を採用したときの心細い心境を述べ、そこで「われわれは人口構造の型が特殊な社会的性格を生み出す“原因になった”と知っているのでは決してない²⁾と釈明している。けれども依然として本文で人口動向の形態を採用する根拠を、ある人類学者及びマーガレット・ミード (Margaret Mead) の意見を引いて述べた³⁾後、人口のサイクルよりも、寧ろ経済的な発展あるいは都市化または教育の普及などの基準を取り上げた方がよかったかもしれないと述懐している⁴⁾。

1) Riesman [18] (1961 preface) pp. xlii—xliii, 加藤 [19] xx—xxi 頁。

2) Riesman [18] p. xliii, 加藤 [19] xxii 頁。

3) Riesman [18] p. xliii, 加藤 [19] xxi 頁。しかしながら私には、この根拠がここでそれ程説得力があるとは思われない。

4) Riesman [18] p. xliii, 加藤 [19] xxii 頁。

社会的性格が、経験によって形成されるものであるならば、その経験に最も強い影響を与える要因を特に強調的に抽出することは議論をより明確にする。ここでは、仮説的に「生産力の発展」¹⁾という「社会的な物的環境」²⁾を取り上

げてみよう。そしてこの生産力の発展という事実は、現象的には実質所得水準の上昇となって具現される³⁾。

- 1) 何故、ここで諸要因のなかから「生産力の発展」を特に取り上げるのか、という問への答えは、本文の以下の議論で答えられる。
- 2) 本論文、99頁の「社会的な物的環境」についての注(1)を参照。
- 3) しかしながら、「歴史的段階」の基準を何らかの1人当りの水準で示すことには多くの問題点が含まれる。「成長の過程というものは、その定義によって、一人当たり所得を上昇させるものであるが、しかしそれは、諸国家間での1人当たり所得の斉一性、また国内の諸地域間でのその斉一性さえをまかならずしも導くものではない。」(Rostow [23] p. 69, 木村 [24] 93頁。) けれども、社会的性格と統計的資料とをつき合わせることは興味ある作業かもしれない。ただ、事実関係の究明は、理論的関係の究明後の課題であると私は考えている。

歴史上の諸段階を何を基準にして区別するかは、恣意的¹⁾であろう。ここでは、人間の「生存」²⁾に対する生産力の発展過程における人々の意識を基準にとる。そのような観点から歴史を見直せば、歴史は基本的には二つの段階に、そして前者の段階はまた二つの段階に区別される。

- 1) どのような段階論の分析が最も「真理」に近いかは別にしても、いかなる段階論的分析の基準にも恣意的要素がかなり含まれているであろう。
- 2) ここでの「生存」とは、物理的な「飢え」との関連において捉えている。

まず、生産力の人間の生存に対する相対的な低さにより人間の意識が「飢餓の恐怖」¹⁾に支配されていた時代、次に、生産力の発展によって「飢餓の恐怖」から人間の意識を解き放つことが可能になった時代である。そして、前者の時代は、「飢餓の恐怖」に対して人間が受容的な態度をとっていた時代と、積極的な態度をみせていた時代とに細分される。

- 1) 「天然の果実と温暖な気候とに恵まれ、辛い労働が生存の条件でないような国々は別として、多くの国々の多くの人々は、長い歴史を通じて、絶えず飢餓の恐怖を感じて来た。この恐怖に追い立てられて、人間は働き続けて来た。(中略) 飢餓或いは餓死への恐怖は、人間が生物である限り、自然的なものである。歴史を通じて、意識の有無を問わず、この恐怖が人間の生活に『自然の型』を与えて来た。自然的恐怖のゆえに、人間は、単に労働して来たばかりでなく、同時に、思想、挙措、言語、服装を含めて自分の行為の全体に或る自発的な限定を加えて来た。それを加えないことは、飢餓或いは餓死の方向へ自分を追いやることであ

った。そこから、数々の非人間的な悲惨が生れると同時に、数々の人間的な、或いは、超人間的な美德が生れた。私たちの間にある悪徳と美德との大部分は、直接間接、この自然的恐怖から流れ出している。(中略)そして、第二次世界大戦後、先進諸国に実現された完全雇用—或いは、それに近い状況—は、人間を飢餓や餓死の自然的恐怖から解放し、それと一緒に、この恐怖の分泌物である『自然の型』からも解放し、『人為の型』もないままに、『感情の真空』を生み出している。」(清水 [29] 301—302頁。)

以上のような区分の仕方は、年代的に明確なものではなく、またいくつかの重要な問題を無視してしまうことにもなる。しかしながら諸々のことを捨象することによる利点もある。すなわち諸々の歴史現象を捨象し、歴史の流れを「生産の時代」から「消費の時代」¹⁾へ、そして「生産の時代」においては、「生産力水準が所与とされていた時代」から「生産力の発展に積極的であった時代」へと大きく捉えることができるのである²⁾。

- 1) いかなる歴史的段階においても生産と消費は併存するが、人々の第一義的な関心がどちらに置かれていたかによって命名しているのである。
- 2) ここで、次のようなウェーバーの警句を銘記しておく必要がある。「……、われわれが今とろうとしている観点……が、ここで問題としている歴史的現象を分析するための唯一可能な観点であるというのでは決してない。観点を異にするならば、ここでも別なものが『本質的』特徴となってくることは、一切の歴史的現象の場合と同様である。」(ウェーバー [30] (上) 38頁。)

どのような実証的な根拠に基づいて時代区分をなすか、については膨大な歴史的資料の渉猟を要するであろうし、その資料の見方についても種々の相違が生じる。例えば、生産力の発展段階としては、経済史の分野でも経済理論の分野でもかなりの成果が存在するので、それらを利用することもできよう。リースマンは、社会的性格と経済発展を照応させる試みとしてコーリン・クラーク (Colin Clark) の産業構造分類を用いる可能性を示唆した¹⁾。しかしここでは、そのような試みの検討は次の研究課題とし²⁾、リースマンによってなされた社会的性格の類型化に対して上記の時代区分がどのように対応するか、についての仮説³⁾を述べてみることにする。

- 1) Riesman [18] p. 9, 加藤 [19] 7—8頁。
- 2) 上記の時代区分は、現在の私の研究段階では単なる着想にすぎない。

- 3) この対応関係の仮説は、その理論的な側面のみであり、実証的な側面は含まれていない。

〔1〕 「生産の時代」

(イ) 「生産力水準が所与とされていた時代」

生産力の発展が人々の生存との関係において未熟で、人々が飢餓の恐怖を感じていた時代のうちの前期の時代は、生産力水準が所与と考えられていた¹⁾。つまり生産力の発展が遅々としており、その可能性についても明確に意識されていなかったのである。そのためその社会全体の所与の所得水準が長期間に亘ってほぼ一定の状態にあることが自明のこととしてその社会に受入れられた。そこでそのような社会の人々の第一義的関心は、その一定の所得水準をいかに保持するか、ということに注がれたのである。そしてそれは、何らかの基準（例えば宗教的権威であることもあろうし、武力であることもあろうし、また経済力であることもあろうし、ときにはある種の民主的な合意であることもある）によって一定の生産力水準の下である分配体系²⁾が成立すると、そのような分配体系を守ろうとする、ことを意味する。というのは、生産力水準が所与でありしかも飢餓の恐怖に脅やかされている場合には、一旦形成された所得の分配体系を崩壊させるということは生産力水準の低下を伴う恐れがあり、そこで社会全体の維持ということからそれが強要されるからである。そしてこのような社会では、一旦形成された所得の分配体系を保持するために、伝統に従うことが要請されるのである。つまり、生産力水準の生存に対する相対的な低さから生じる飢餓の恐怖の下で既存の分配体系を守るという“外的な強制力”³⁾が、人々をして伝統志向型という“内的な強迫”に転化したのである。伝統志向型の社会的性格において「伝統そのものが達すべき目的」⁴⁾となったということは、経済的には、飢餓の恐怖の下で「分配体系を守る」ということなのであった。

- 1) このような状況をロストウは、次のように述べている。「しかしながら、伝統的社会という概念はけっして静止的なものを意味しているのではない。それは産出高の増加をかならずしも否定するものではない。(中略)しかし、伝統的社会に関する中心的事実は、一人当り産出高の到達しうる水準に上限があったということである。この上限は、近代科学および技術にその源をもつさまざまな潜在的

可能性が、当時においては、いまだ利用できる形になっていなかったという事実、ないしは、いまだ規則的かつ組織的に応用されるにはいたらなかったという事実によって生じたものである。」(Rostow [23] p. 4, 木村 [24] 7—8頁。)

- 2) ここで「分配体系」という用語を一般的な用語である「分配状態」の代わりに用いたのは、分配体系という用語によって、個々人の分配状態は変化しても（例えば、封建社会においてその支配者が変わろうとも）、社会全体の分配の体系は本質的に変化しない、ということを強調したかったためである。
- 3) 本論文, 98頁を参照。
- 4) 本論文, 90頁を参照。

(ロ) 「生産力の発達に積極的であった時代」

生産力水準が一定であるということが自明の理と考えられていた社会も、商品経済の浸透に伴い資本蓄積が進み、それと断続的な技術革新とが相俟って生産力の緩慢な発展が進行していたのである。そして遂に生産力の発展の可能性が意識されることになったのである。W・W・ロストウ (W. W. Rostow) はそのような状況を次のように言い表わした。

「伝統的社会とは、その構造の発展が、ニュートン以前の科学と技術とに基礎をおくとともに、外的世界に対するニュートン以前の態度に基礎をおいた、限られた生産関数の枠内にとどまっていた社会である。ここでニュートンという言葉を用いたのは、外的世界はいくつかの認識可能な法則に従うものであり、かつ生産のためにそれを操ることが体系的に可能である、ということを人が広く信ずるにいたったあの歴史上の分水嶺を象徴するためである。」¹⁾「そして、なかんずく、次のような考えが広まらなければならない。すなわち、人間は、自分を取りまく外的環境を、自然と神とによって事実上与えられたものとみる必要はいささかもなく、合理的に理解されるならば人間が自由に操ることができ、それによって生産的変革とそして少なくとも一つの次元においては進歩とをもたらすことのできる、一つの秩序ある世界とみるべきなのであるという考えがそれである。」²⁾

1) Rostow [23] p. 4, 木村 [24] 7頁。

2) Rostow [23] p. 19, 木村 [24] 27頁。

このようなロストウ的な見解によるニュートンの態度の成果が社会の隅々まで浸潤していくためには、もっと広範な社会的雰囲気としての「富の意識的な追求」が存在していたのである。マックス・ウェーバー (Max Weber) の次のような分析は、それを最も端的に示すものである。

「けだし、ピューリタンは人生のあらゆる出来事のうちに神の働きを見るのであるから、そうした神が信徒の一人に利得の機会をあたえたまうたとすれば、神みずからが意図したまうたと考えるほかはないのである。したがって、信仰の深いキリスト者は、この機会を利用することによって、神の聖召に応じなければならない。『もしも神があなたがたに、みずからの霊魂も他の人々の霊魂も害うことなく、律法にかなったやり方で、しかも、他の方法によるよりもいっそう多くを利得しうるような方法を示したまうたばあい、もしそれを斥けて利得の少ない方法をえらぶとすれば、あなたがたはみずからに対する聖召 (calling) の目的の一つに逆らい、神の管理人 (steward) としてその賜物を受けとって、神の求めたまうときにそれを彼のために用いることを拒むことになる。もちろん肉の欲や罪のためではなくて、神のために富裕になるようあなたがたが労働するのはよいことである。』富が危険視されるのは、ただ怠惰な休息や罪の快樂への誘惑としてのみであるし、富の追求がそうであるのも、他日煩いなく安逸に暮すためになされるばあいだけである。むしろ、職業義務の遂行は道徳上許されるに止まらず、まさに命令されているのである。』¹⁾

1) ウェーバー [30] (下) 187—188頁。

最早人々は生産力水準一定を自明の理とせず、しかも分配体系の変化は、生産力水準の変化を齎す可能性はあるが、必ずしも人々を全般的な飢餓の状態に落とし入れることにはならない、ということが人々に意識されたのである。しかしながら生産力水準は依然として低いために、飢餓の恐怖はやはり人々を支配し、それが人々の社会的行動の根本的な起動力のひとつであることは、以前の社会と同様であった¹⁾。

1) マルサスの人口法則は、まさにこのような時代を背景にしていた。彼は、飢餓の恐怖を人口と生産力との対比で見事に描いてみせたが、しかし生産力がその後

目覚ましく発達した諸国で、マルサスの予言が的中した国はなかったのである。マルサスの主張は、結果論的な観点からすれば、「飢餓の恐怖」を恐怖として人々の意識の中に押し込んだことにその特徴があったのである。

けれども生産力の発展の可能性を知った社会においては、以前と同じ飢餓の恐怖に脅かされているにしてもそれから生じる社会的・経済的行動は以前の社会とは対照的な行動となって現われたのである。伝統的な生産様式を打ち破り、その結果伝統的な分配体系を打ち破り、所得の分配は富の蓄積に従うという新しい分配体系を求める攻撃的な行動が出現したのである。このような行動の変化は、それと相互作用を繰り返しながら社会的意識の変化を齎し、従来の伝統志向型とは異なる型の社会的性格を生み出したのである。そしてそれは、自己に重きをおく内的志向型であった。ウェーバーは、そのような社会的性格を宗教的な倫理観に見て取ったであろう¹⁾。

- 1) 「ところで、実践上からみると、このことは結局、神は自ら助ける者を助けるということの意味する。つまり、往々いわれるように、カルヴァン派の信徒は自分で自分の救いを——正確には救いの確信を、といわねばなるまい——『造り出す』のであり、しかも、それはカトリックのように個々の功績を徐々に積みあげることによってではありえず、どんな瞬間にも撰ばれているか、捨てられているか、という二者択一のまえにたつ組織的な自己審査によって造り出すのである。」(ウェーバー [30] (下) 56頁。) また、「……、いま一度要約していうならば、われわれの研究にとって決定的意味をもつ問題点とは、次のようなものであった。どの分派においてもつねに宗教的な『恩恵の地位』をば、被造物の頽廃つまり現世から、信徒たちを分かつ一つの身分 (status) と考え、この身分の保持は——その獲得の仕方はそれぞれの分派の教義によって異なるけれども——なんらかの魔術的=聖礼典的な手段でも、懺悔による赦免でも、また個々の敬虔な行為でもなくて、『自然の』ままの人間の生活様式とは明白に異なった独自の行為をもってする証明によってのみ保証されうるとした。」(ウェーバー [30] (下) 162—163頁。)

ロストウもまた、経済成長を推進する人々にそのような社会的性格を感じていたであろう¹⁾。

- 1) 「概していえば、これらの時期〔諸国家の、成熟への前進に当たる時期〕は社会の生涯において自信に充ちた時期であって、遂行すべき大きな明瞭な仕事が存在していたし、その仕事の結果も直ちにあらわれた。社会は気が進まぬと否とに

かかわらず、産業界の指導者——彼らはまたときには政治家でもあった——を自由に振舞わせた。」(Rostow [23] p.70, 木村 [24] 95—96頁。) また、「近代経済史を理解するためには、成長過程にある経済の最初の三世代の指導者層を比較すること以上に十分な成果をあげうる試みは、まずありえないであろう。(中略) 第二世代は、前途に横たわる可能性の規模を見通して、必要とあれば社会そのものを無視しても、社会を成熟へと駆り立てようとした苛酷な仕事師たち。」(Rostow [23] p.72, n. *, 木村 [24] 97頁, (注)。)

しかしながら、このような内的志向型の社会的性格においては、外観はその社会的・経済的行動が独自の行動目標にだけ基づいているかのようにみえるが、先述(93頁)したように、「富の成功」つまり生産力の増大というより窮極的なそして社会的に「一般化」¹⁾された目標が存在していたのである²⁾。それは、人々の各自の目標設定に最も重要な影響を与える社会的環境として、飢餓の恐怖が未だその影を落としていたからである。

1) 本論文, 90頁を参照。

2) マルクスの表現を借りれば、このような社会は「……, 生産が人間の目的であり, 富が生産の目的として現れる近代的世界……。」(マルクス [10] 31頁)であったのである。またウェーバーによれば、「そればかりか, この『倫理』の『最高善』(summum bonum)ともいうべき, 一切の自然の享楽を厳しく拒けてひたむきに貨幣を獲得しようとする努力は, 幸福主義や快楽主義などの外衣を全然帯びていず, 純粹に自己目的と考えられているために, 各個人の『幸福』や『利益』に対立して, つねに, まったく超絶的なものまたおよそ非合理的なものとして立ち現われている。営利は人生の目的と考えられ, 人間がこれによって物質的生活の要求を充たすための手段とは考えられていない。これは公平に見れば『自然の』事態を倒錯したおよそ無意味なことではあるが, また明白に資本主義の無条件の基調^{ライトモティーフ}であって, その空気に触れない人には理解しえないものである。それとともに, それがたたえている雰囲気は一定の宗教的観念と密接な関連をもっている。」(ウェーバー [30] (上) 46—47頁) のであった。

しかしながら, ウェーバーは次のように後述している。

「現在ではかかる『資本主義精神』に充たされた人々は, 教会に反対ではない場合にも, 無関心な態度をもっているのが常である。天国における無為な生活の思想は, 信仰深くはあっても, 活動的な彼らの性格には魅力をもたない。彼らの目には宗教は地上の労働から人々を離れしめる手段として映じるのである。彼らが休みなく奔走することの『意味』を彼ら自身に問うて, かかる奔走のために片

時も自己の財産を享樂しない態度は純粹に現世的な生活目標からみればまったく無意味でないかと云うなら、彼らは、もしこの問いに答えうるとすれば、『子や孫への配慮』だということもあるだろう。(中略)〔しかし〕より正確に、自分にとって不断の労働を伴う事業は『生活に不可欠なもの』となってしまうからだと、と端的に答えるであろう。これこそ彼らの動機を説明する唯一の的確な解答であるとともに、事業のために人が存在し、その逆ではない、というその生活態度が、個人の幸福の立場からみるとまったく非合理的である点を明白に示すものにほかならない。(中略) こうした企業家は巨富を擁しながら自分のためには『一物も有たない』、一ただよき『使命としての職業の遂行』という非合理的な感情をもっているにすぎないのである。(ウェーバー [30] (上) 79—81頁。)

「資本主義的経済秩序はこうした貨幣獲得を使命とする『職業』への献身を必要としている。それは、外物に対する人間の態度のうち資本主義的経済構造にもっとも適合的なものとして、現在経済的生存競争に勝利をうるための条件と深い関係をもつようになっているので、今日ではそのような『貨殖者的』生活態度が何らかの統一ある『世界観』と必然的な関連をもっているかどうかというようなことは、もはや事実上問題とならないのである。ことに今日ではこうした生活態度は宗教上の勢力からの是認によって足場を与えられることは不必要であり、むしろ国家による経済生活の統制を好まないように、教會的規範の経済生活への影響がなおありとすれば、これを妨害として感じるようになっている。むしろそうした場合、商業政策や社会政策上の利害の方が『世界観』を決定するのがつねである。資本主義的な成功の条件に自分の生活を適應せしめないものは、没落しないにしても繁栄することはない。しかしこれは、近代資本主義が勝利の地位をえて、古い足場から自己を解放した時代における現象である。かつて資本主義が、形成期の近代国家の権力と結合することによってのみ古い中世的経済統制の諸形態を破壊しえたように、宗教的権威との関係についても、恐らく——と一応云っておきたい——そうしたことが起こりえたのではないか。」(ウェーバー [30] (上) 81—82頁。)

こうしたウェーバーの見解に対して私が抱いているある考えを示したいため、長い引用となった。それは、資本主義の「精神」が、「一定の宗教的観念と密接な関連をもって」いようと、「使命としての職業の遂行」であろうと、また「商業政策や社会政策上の利害」であろうと、その根はやはり「飢餓の恐怖」という外的な強制力に繋がり、「生産力の発展の可能性に対する認識」という社会的環境の中で成育していったものだと考えている、ということである。ただ、その成育過程で種々な様相をみせることは勿論である。

また、ウェーバーの次のような陳述も、「外的な強制力」の「内的な強迫」へ

の転化（98頁を参照）に関して重要な示唆に富むものなので、注としては長くなるが、続けて引用する。

「われわれは、すでにルッターにおいて、分業にもとづく職業労働が『隣人愛』から導きだされるのを見た。しかし、彼のばあいには不確定で、まだ構成材料にすぎないような思想的萌芽に止まっていたものが、カルヴァン派においては、いまや、その倫理体系の特徴的な部分となるにいたったのである。『隣人愛』は、——被造物でなく神の栄光への奉仕でなければならないから、——何よりもまず *lex naturae*（自然法）によってあたえられた職業の任務を履行することのうちに現われるのであり、しかもそのさい、それは特有な事物的・非人間的な性格を、つまり、われわれを取り巻く社会的秩序の合理的構成に役立つべきものという性格を、帯びるようになる。けだし、この社会的秩序の構成と編制はおどろくほど合目的的であって、聖書の啓示に照らしても、また生得の直観によっても、それが人類の『実益』のために役立つよう準備されていることは明瞭であるから、この非人間的、社会的な実益に役立つ労働は神の栄光を増し、聖意に適うものと考えられることになる。」（ウェーバー [30]（下）36頁。）

ところで、大塚氏の見解（ウェーバー [30]（上）解説）によれば、ウェーバーの主張する重要な点として「営利欲」と「エートス (Ethos)」、*「倫理 (Ethik)」*と「エートス」の峻別がある。この内でウェーバーが最重視する「エートス」こそが、外的な強制力（「飢餓の恐怖」）が内的な強迫に転化したものにほかならないのではなかろうか、と私は考えている。つまり、「……かの『人類の歴史とともに古い』*「営利欲」*（ウェーバー [30]（上）151頁）は人間の自然的な衝動であり、必ずしも歴史的に特有な社会的性格ではなく、また『*「倫理」*という語がすぐれて規範を意味し、教義と関連せしめられているのに対して、『*「エートス」*という語の概念構成においては、そのような『*「倫理」*が、たとえばさきに見た営利欲の場合などと同じように、人々のうちにやどり、彼らを内側から一定の方向に押しうごかしていくところのいわば現実の起動力としてとらえられている。」（ウェーバー [30]（上）148—149頁。）そして資本主義の『*「精神」*は、「……何よりも特定の『*「倫理」*』であり、人々を内側から一定の方向にむかって押しうごかしていくところの『*「倫理」*』的雰囲気であり、彼〔ウェーバー〕の好んで用いる術語をもちいると、そうした近代の西ヨーロッパに固有な『*「エートス」* (Ethos) 』なのである。」（ウェーバー [30]（上）146頁。）また、「……、『*「倫理」*が単に *Sollen* の面において規範意識としてでなく、むしろ『*「エートス」*』として、すなわち人々を内側から押し動かすところの起動力として *Sein* の面において捉えられるにいたったということは方法論上かなり重要な意義をもっている。」（ウェーバー [30]（上）149頁。）このように、ウェーバーの述べる特定の歴史的な性格としての「エ

ートス」こそが、「飢餓の恐怖」という外的な強制力が「生産力の発展の可能性が意識された時代」という歴史的に特有な社会状況を経て、内的強迫に転化したものにほかならない、と私は考えている。

既に富を所有しているか否かは、その人の社会的性格に強い影響を及ぼすが、無産者だからという理由だけでこれらの人々が特別な社会的性格を有していたわけではない。寧ろ、逆にそれだからこそ、人々は「富の成功」という社会的目的を容認していたのであった。C・W・ミルズ (C. W. Mills) は、このような状況を次のように述べている。

「しかし財産の有無が意識や政治的態度を決定する唯一の要因でないことは、賃銀労働者とホワイト・カラーの両者を含めて、無産者が必ずしも必然的に社会主義的意識をもつとは限らぬ事実によって明らかに示されている。

ホワイト・カラーも賃銀労働者も、財産の問題にみずから強い関心を示したことはなかった。19世紀に財産が集中的な論議の的になったとはいっても、それは一人の人間の短い生涯の問題としてでなく、世紀を単位とする現象として論じられたのである。個人の問題としては、いわゆる『財産の剝奪現象』がもっともひどかったと思われる農民の子弟でさえ、都市における無産者の生活を想像するよりは、都市の魅力にばかり気をとられていたし、俸給生活者も長い眼で見れば、世代ごとに生活水準は向上していると信じていたから、無財産が必ずしも意識面での貧民化を意味するとは限らなかったことは明らかである。したがって、財産の剝奪および社会的集中という経済現象は、必ずしも心理的苦痛として感じられたわけではない……。」¹⁾

そして富の成功とは、次のような型であった。

「当時の観念における成功の典型は、公開の市場で種々の困難を克服して事業を繁栄させてゆく企業家であった。

〔改行は原文通り〕初期の自由主義理念では、成功とは小規模な企業を創設して、他の企業との競争を経て、その規模を拡大してゆくことであった。労働者は職長となり、次いで事業主となることを目標としていたし、商店員は番頭か外交員になって、それから自営の商人になろうとしたし、農夫の息子は親か

ら土地を譲られて、比較的若いうちに利益をあげて自立することができた。このような成功の過程における競争や努力によって、自主独立のパーソナリティーが培われ、やがてはそれが経済的政治的なデモクラシーの基盤になると信じられていた。

職場での地位の向上ではなく、財産の増加が成功を測る直接の尺度とされた。青年の将来を論ずるに当たっては、つねに彼が財産を作れるかどうかの問題となった。そして、真の成功は、相続財産ではなくて、裸一貫から自力で築き上げた財産によって証明されると考えられた。事業は相続さるべきものでなく、各人がその能力と努力によって資産を築くことこそが真の事業であるとされた。

古い企業家のイデオロギーによれば、成功とは、強い意志力と節儉を主とする個人的な地味な美德、秩序と簡素を重んずる習慣、安易な生活には我慢できない生来の性格、とつねに結びつけて考えられるものであった。これらの美德は成功の条件であると同時に証拠でもあり、それがなければ成功はおぼつかない代りに、それがありさえすれば成功は疑いない。そして、幾多の実例が示すごとく、すべての成功者は偉大な強烈な意志力をもってこれらの美德を実践した人々であり、険しい困難な道を自力で喘ぎ登って行くことによってのみ、幸福の宮殿に達しえたのである。²⁾

1) Mills [12] p. 297, 杉 [13] 276頁。

2) Mills [12] p. 260, 杉 [13] 244頁。但し、この引用文からはアメリカ的な、特有の「成功」を割引かなければならないが。

このようにして、「富の成功」は自己の意志の強い内的志向型の社会的性格を強要し、またそのことが「富の成功」を約束したのである。

ところで、生産力の発展の直接的な要因のうちで、ここでは資本蓄積とシュムペーター (J. A. Shumpeter) の名づけた「企業者機能」を取り上げてみよう。というのは、内的志向型の社会は、まさにこのような要因を推し進めてきた社会であったからである。

資本蓄積は、各自の責任において、ときには他人を犠牲にしても許される程

の自由を含む経済自由の主張の下で、内的志向型の社会的性格によって助長されたし、またそれを助長しました。つまり資本蓄積は富の成功に繋がり、この目的に努力することこそが個人の行動目標になっていたのである。成功者にとって可能となる奢侈的消費は、富の増大ということから考えるならば第一義的な関心ではなかった。ケインズ (J. M. Keynes) は、社会からの要請という意味を込めて、そのことを次のように述べている。

「ヨーロッパは、社会的にも経済的にも、最大限の資本蓄積を確実になしとげうるように組織されていた。……、社会は、増加した所得の大部分を、それを最も消費しそうな階級の支配下におくような形に組み立てられていた。19世紀の新興の富者たちは、大きな支出をするようには育てられていず、即時の消費の快楽よりも、投資の自己にもたらす力の方を選好した。(中略)もし富者が自己の手にする新たな富を自分たち自身の享楽のために費消していたとすれば、世界はとうの昔に、このような体制を耐えがたいものと思うようになっていたに違いない。だが彼らは、蜜蜂のように貯蓄し蓄積したのであり、彼ら自身はもっと狭い目的しか念頭においていなかったのだが、にもかかわらず、それが社会全体の利益にも役立ったのである。

(略) ……資本家階級は、ケーキの大部分を自分たちのものと呼ぶことが許され、理論上はそれを消費することも自由だったのだが、その背後には、実際にはそのほんの僅かな部分しか消費しないこと、という暗黙の条件がついていた。『貯蓄』の義務が美德の10分の9となり、ケーキの成長が真の宗教の目的となった。(中略)そして、そのようにして、ケーキは大きくなっていった。しかし、どういう目的のために、ということは、はっきりとは考えられていなかった。一人一人が説き勧められていたのは、断念せよということよりは繰り延べよということであり、保障や予見のもたらす快楽を涵養せよということだった。(中略)ケーキの美德は、それが決して消費されないこと、貯蓄者当人によっても、その子孫によっても、決して消費されないこと、にあったのである。

(略) 社会は、その存在の無意識の深所で、はっきりと事態を心得ていたのである。ケーキは、消費の欲望と比べて、まったく非常に小さかった。そこ

で、もしそれがすべて分けられてみたところで、誰もケーキの分割によってそう裕福にはならないに違いない。社会が働いているのは、今日の小さな快樂のためにではない、未来の保障と種族の改善のため一実に、『進歩』のためなのだ。」¹⁾

1) Keynes [4] pp. 11—12, 早坂 [5] 13—14頁。

このように、内的志向型の社会における資本家階級は、「資本の蓄積」という社会的な目的の下で行動していたのである。このような行動においては、「他の人間の存在」はほとんど考慮されていなかった。たとえ考慮されていたとしても、それは資本の蓄積をいかに合理的に達成するかという手段としてであって、目的としてではなかったのである。

シュムペーターは、経済発展の根本現象として「企業者機能」を取り上げ、この企業者機能の担当者である経済主体を「企業者」と呼んだのである。そして、その類型としての企業者の行動様式について次のように叙述する。

「たしかに、彼の動機はとりわけ利己的に——『高度の利己主義』とか傍若無人という意味においても——彩られている。すなわち、彼はなにしろまったく伝統も係累ももたず、あらゆる束縛を打破する真の原動力であり、自分の育った社会層や自分の参加する社会層の超個人的価値体系に対してまったく無縁のものである。(中略)彼の『経済的動機』すなわち財貨獲得の努力は、獲得された財貨の消費が与える快樂感に根ざすものではない。

(略) われわれは日常、経済の指導的人物や一般に経済運営において衆に抜きん出ている人がまたたくうちに巨大な財産を支配するようになるのを見てい。しかも彼らはこれにとどまらず、さらにその全力をより多くの財貨の獲得に捧げ、まったく他のことを考える余裕すらもっていないのである。

(略) ……彼らは資力をもっているから豪奢に暮らすのであって、豪奢に暮らすために資力を獲得するのではない。(中略) 彼は他に為すべきことを知らないために、たえまなく創造をする。彼は獲得したものを享樂して喜ぶために生活しているのではない。」¹⁾

1) シュムペーター [25] (上) 239—244頁。

そしてこのような企業者類型の下で、その行動動機として次の三つのものを観察するのである。第一に、私的帝国建設への夢想と意志、第二に、勝利者意志（闘争意欲・成功獲得意欲）、第三に、創造の喜び、である。

シュムペーターが見てとった企業者類型の動機は以上のようなことであるが、ここで重要なことは、「消費」そのものが企業者行動の第一義的な動機となっていない、ということである。また、シュムペーターが企業者類型の本質的動機として挙げた上記の三つの動機についても、それぞれすべて「生産」のもつ「力」をその源泉にしているのではなからうか。そこには、やはり「生産の時代」という社会的環境が色濃く映し出されているのである。

〔2〕 「消費の時代」

生産力の急激な発展は、人々を飢餓の恐怖から解放することになった¹⁾。とはいっても、人々はそのことを明白に意識しているわけではない。むしろ、生産的行動に駆りたてる動機に代わるものが見い出せぬ場合には、意識的に飢餓の恐怖をつくり出す場合すら存在する²⁾。しかしながら人間の物理的生存以上の生産力の発展が確保された新しい状況の下では、人々は第一義的な目標として「生産力の増大」を掲げることに疑義を感じるようになる。

- 1) 「完全雇用が人間をこの〔餓死の〕恐怖から解放した時代は、多くの国々において、謂わゆる高度大衆消費時代とほぼ一致する。物質的欲望の満足が大衆的規模において前例のない発展を見るに至った時代である。」（清水 [29] 320頁。）
ロストウもこのような状況を次のように述べている。

「20世紀に社会が成熟期に到達したとき二つのことが起こった。一つは、一人当り実質所得が上昇して多数のひとびとが基礎的な衣食住を超える消費を自由に行なえるようになったことであり、一つは、労働力構造が変化し、たんに全人口中に占める都市人口の比率が増加しただけでなく、事務労働者や熟練工場労働者——成熟した経済が産み出した消費財を意識しそれを獲得したいとねがう——の比率が増加したことである。」（Rostow [23] p. 10, 木村 [24] 16頁。）「事実上すべてのひとびとが自分の所得によって立派な食事をとることができるようになり、そして食事がその豊かさの故に社会的な保健上の問題を起こしているような社会、住宅がみな同じ様式になったためにひとびとが住宅を改良しようと努力しなくなった社会、衣服がどれも同じように適当なものとなった社会、二つの尾びれのついた怪物のようなアメリカ大型車とまではいかなくともラブレッタやフォ

ルクスワーゲンが事実上すべての人の手に入るようになった社会、そのような社会にはどんなことが起こるであろうか。」(Rostow [23] p. 91, 木村 [24] 122頁。)

なお、ロストウは、ガルブレイスの「豊かさ」を批判して「選択と配分の問題——稀少性のゆえに起こる問題——はまだとりのぞかれていない。」(Rostow [23] p. 81, 木村 [24] 110頁)と主張しているが、現代、「選択と配分の問題」が多大な関心を集める第一義的な理由は、「稀少性ゆえ」(もちろん、このような理由によることも論をまたないが、それが第一義的な理由ではなく)ではなく、選択と配分の方角によっては、大規模なエネルギーによる破壊の可能性の下にある地球の生存、公害などによる物質的社会環境の破壊の可能性と、統一体としての社会が必要とする精神的社會環境が定まらないために社会が解体してしまうという可能性の下にある社会の生存、そして人生の意義の喪失の可能性の下にある個人の生存、という理由なのである。つまり、「選択と配分の問題」の第一義的な重要性は、L・ロビンズ (L. Robbins) のそれとは異なり、今日では、原因に拠るのではなく結果に拠るのである。

- 2) ガルブレイスは、現代の「生産の優位」が依拠する理由を「飢餓の恐怖」よりも「経済的保障」にみている。(Galbraith [2] chap. VIII, 鈴木 [3] 第八章。)

そこで人々の第一義的な経済的関心は、生産から再び消費に向いてくる¹⁾。その理由は、元来人間の生産活動の始源的な動機は、生存の維持にあったからであり、そして生存の維持は、消費という行為を必要としているからである。しかし、生産力が人々の生存に対して相対的に低い飢餓の恐怖の下での消費と、生産力が人々の生存に対して相対的に高い場合の消費とは、その持つ意味と性質は全く異なるのである。それは後述 (118頁) するが、「消費内容の非独自性」に由来する。

- 1) 「……、技術的成熟に近づくにつれ、人は自分の生まれた環境を、つまりこの場合についていえば十分に進歩した工業社会という環境を、当然のものとして受け取り始める、そして彼らのところは成熟した経済に課せられるべき諸目的について次第に考え直すようになる、ということであった。

経済学の専門的見地からいえば、成熟に近づき、さらにそれを越えて進んでいくにつれて、社会の関心のバランスは供給から需要へ、生産の問題から消費の問題へ、そしてもっと広い意味での福祉の問題へと移っていったのである。」(Rostow [23] p. 73, 木村 [24] 99頁。)そしてロストウは、「成熟後の段階」において選択しうる三つの目標を提示するのであるが、私の本文の論述は、ロストウの提示した三つの目標の中で「消費水準を基本的な衣食住を超えて拡大する」という目

標に最も関連が深い。ロストウによれば米国はまさにそのような選択をしたのである。「……、アメリカの資源は次第に成熟後の第三の目標に向かって——すなわち、新しい次元の消費に向かって——流れるようになったのである。」(Rostow [23] p. 76, 木村 [24] 103頁。) しかもこのような歴史的な流れをロストウは、「自由経済においてははっきりとあらわれるところの需要の所得弾力性という点から考えて論理的」(Rostow [23] p. 83, 木村 [24] 112頁) なものと考えている。

ところで、人々の第一義的な関心が生産から消費へ移行したからといって、生産の必要性が低下したわけではない。消費は生産を前提にしなければ保証されない。否、生産を維持するためにこそ、消費が鼓吹され、その結果消費に対する関心が呼び起こされることになったのである¹⁾。J・ロビンソン (J. Robinson) によれば、「西側の世界は、市場経済の崩壊によって、ケーキがすでに大きくなっていること、もしもそれが切りわけられないならば、それは乾からびてくずれてしまうことを学んだ。」²⁾ のである。ケインズの有効需要論はこのような状況で登場し、需要による生産の確保という「富裕な社会 (wealthy community)」における新しい依存関係を明らかにしたのである³⁾。ケインズの真意は決して消費の奨めではなく、生産機構の崩壊を阻止するというものであったが、しかしながらその政策の実際に意味したものは、人々をして消費に第一義的関心を抱かせるようなものであった⁴⁾。

- 1) 消費のために生産が喚起され、その生産の維持・増大のため消費が一層喚起され、そのことがまた生産の消費に対する地位を相対的に低める、という自己否定型の弁証法的発展過程を歴史が辿っているのかどうかは、興味深い研究課題だと考えている。しかし、それについてどのような判断も今は持っていない。
- 2) Robinson [21] p. 13, 山口 [22] 13頁。
- 3) Keynes [6] p. 31, 塩野谷 [7] 35—36頁。
- 4) 経済学においては、「消費の理論」と「生産の理論」が「市場の理論」に対する二大支柱として研究されてきたが、それは同等の地位を占めていたのではない。通常、「近経」と呼ばれる経済学のミクロの分野では、「消費の理論」が「生産の理論」よりも先に陳述されるという慣例があり、それは消費者主権を暗に誇示するかの如くであるが、実は「生産の理論」の「露払い」にすぎないのである。「消費需要の理論は経済学の現在の目標にとって、あまりあてにならないおかしなしろものである。一見したところ、それは、生産が相変らず重要性を失わず、目標としての生産がわれわれの最大の関心事であることを弁護しているよう

である。」(Galbraith [2] p.132, 鈴木 [3] 173頁。)

さらに比喩を続ければ、「市場の理論」も「生産の理論」の「太刀持ち」にすぎないのである。

一方、ミクロの面においても、大量生産方式によって消費財が奔流の如く生産され、「これらの消費財の奔流をながめてみれば、ここにまたそれがすべて大衆消費の品物で」¹⁾であったのである。そして「大衆に商品を生供給するという次から次へと生ずる問題は、資本主義的生産方法のらち内にそれをもち込むことによってうまく解決されてきた。」²⁾のである。

1) Schumpeter [26] p. 68, 中山 [27] (上) 125—126頁。

2) Schumpeter [26] p. 68, 中山 [27] 126頁 (但し, 筆者訳)。

さらに、ガルブレイス (J. K. Galbraith) が指摘する依存効果は、現代の消費欲望の造出過程を暴露したものであった。「欲望は欲望を満足させる過程に依存する」¹⁾のである。このような依存効果も、生産過程自体を維持・伸張することをその真意とするものであるが、実際的には消費欲望が人々の第一義的な関心事になることを助けるのである。

1) Galbraith [2] p.131, 鈴木 [3] 173頁。

このように生産力の増大に伴い人々の第一義的な関心が生産から消費に移行すること¹⁾と、社会的性格としての他人志向型がどのような関係にあるのかを次に考察してみよう。

1) 人々の中には、第一義的な関心は依然として生産面には留まるがその内容が変化し、生産活動それ自体に関心を向ける人々が存在するであろう。しかしながら、生産から消費に第一義的関心が移行する必然性がないのと同様にそのような移行も必然性がない。ただここでは、生産から消費への第一義的関心の移行の可能性が、資本主義社会の機構の中では他の方向よりも容易く行なわれる、ということだけである。

消費欲望それ自体は人間本来の独自のなものであるが、消費欲望の充足対象の選択に関してはそれ程明確な独自性を有していない。つまり、人々は消費欲望の充足対象については基本的なものを除いては先験的に想像し得ないのである。そこで人々は、半ば環境 (これには他人も含まれる) に半ば自己の試行錯誤

的な行動によって得られた経験と情報によって消費充足の対象を選択する。しかもその選択は、ある特定の消費欲望を充足させる対象が数多く存在すればする程、選択時における独自性は稀薄化してゆく。そこで自己の消費欲望の充足の内容と程度は、他人の消費のそれらに比較して判断することになり、その過程で人々の社会的な性格は相対的な性質をもつ他人志向型の社会的性格へと変貌してゆくのである。それに加えて、他人に対する誇示の欲求¹⁾、あるいは人類が持つ、人間同士の交流に対する欲望という意味での社会的な欲求が、基本的な消費欲望の充足後に現われるという生物学的な欲望の段階があるならば、それらの欲求が消費行為に反映されることによって、他人の消費水準とその内容に対する関心はますます膨張されるであろう。

- 1) 「……，それら〔人間のもつ〕の欲求は二つの種類に分かれる。すなわち、われわれが自分の仲間の人間の状態がどうであろうと必ず感ずるという意味での絶対的な欲求と、その充足によって自分自身の状態が向上して、仲間に対して優越感をもつようになる場合にのみ感ずるという意味での相対的な欲求とである。」
(Keynes [8] p. 326, 救仁郷 [9] 337頁。) 但し、現代では必ずしもこの誇示の欲求はケインズやヴェブレンが主張した程強いものではないが、しかしながら消費水準が他人（ただ、この比較対象になる他人は、いろいろな面から考えて自分とほぼ同じ生活水準でなければならぬと考えている人ではあるが）よりも劣ることに対しては、強い不寛容さを有しているように見受けられる。寧ろリースマンの述べた他人志向型の人間は、ヴェブレン的な行動とは逆の行動、つまり他人よりも明白に（些細なところでは目立つことを望むが）目立つことを非常に嫌がる態度をとるのである。

このようにして、消費欲望の充足の様態によって他人志向型の社会的性格が形成されてくるのである¹⁾。つまり、他人志向型が形成されるには、特有な歴史的段階——飢餓の恐怖からの解放が可能となる豊かな社会——と特有な社会制度——資本主義体制——が与かっているのである。

- 1) 勿論、その事だけが唯一の原因ではない。他に社会的・心理的・生物的にさまざまな原因が錯綜している。例えば本文中に述べた「誇示の欲求」や「社会的な欲求」は、「消費」ということを通過しなくても、それ自体で最早他人志向型の性格を含んでいるかもしれない。しかしながらそれらが、本論文で用いている「社会的」であるかどうかは疑問である。

これ迄の議論は、社会的性格に対する外部からの働きかけを述べたものであった。しかしながら逆にある特有な社会的性格（ここでは他人志向型）から外部への働きかけも存在する。すなわち、社会的性格として他人志向型を有しているような人々は、その経済的行動においても、以前とははなはだ異なった行動をとるようになるのである。

例えば、ケインズの目には、現代の投資行動は以前のそれと異なり次のような動機の下でなされると映ったのである。

「また、比喩を少し変えていえば、職業的投資は、投票者が百枚の写真のうちから最も容貌の美しい6人を選択し、その選択が投票者全体の平均的な好みにもっと近かった者に賞品が与えられる新聞投票に見立ててもよいであろう。この場合には各投票者は彼自身が最も美しいと思う容貌を選ぶのではなく、他の投票者の好みにもっとよく合うであろうと思う容貌を選択しなければならないのであって、しかも投票者のすべてが問題を同じ観点から眺めているのである。ここで問題なのは自己の最もよい判断から真に最も美しい容貌を選ぶことでもなければ、いわんや平均的な意見が最も美しいと真実に考える容貌を選択することでもないのである。われわれが平均的な意見は如何なる平均的な意見を期待するかを予見することにわれわれの知力を集中する（以下略）。」¹⁾

「真実の長期期待を基礎とする投資は今日ではきわめて困難であって、ほとんど実行不可能となっている。それを企てる人はたしかに、群集が如何に行動するであろうかを群集よりもよりよく推測しようと試みる人に比べて、はるかに骨の折れる日を送り、はるかに大きな危険を冒さなければならないのであって、同等の知力をもってするならば、彼はいっそう悲惨な間違いをしでかすことになるであろう。社会的に有益な投資政策が最も有利な投資政策と一致するという明白な証拠は経験からは得られない。仲間を出し抜くよりは時の力とその将来に関するわれわれの無知を打破する方がいっそう多くの知力を要求する。」²⁾

「金融界の外部においてさえ、アメリカ人は平均的意見が平均的意見は如何なるものであると信ずるかを発見することに不当に関心を寄せる傾向があ

る。」³⁾

- 1) Keynes [6] p. 156, 塩野谷 [7] 174頁。
- 2) Keynes [6] p. 157, 塩野谷 [7] 175頁 (但し, 一部筆者訳)。
- 3) Keynes [6] p. 159, 塩野谷 [7] 177頁。

私は、ここに述べた投資行動だけに限らず、ケインズの主張の根底そのものに、それまでの経済理論とは異なる人間類型の影がみえるのではなからうかと考えている¹⁾。

- 1) ただし、ケインズ自身がそのような人間類型を認識していたかどうか、という考証的な視点からではなく、ケインズの主張を「他人志向型」という人間類型の視点から改めて眺めなおしてみる、という方法論的な解釈から捉える。以下、ケインズについての解釈もこのような観点からのものである。

武藤氏は、このことを次のように述べている。

「いまかりに、このような社会的性格に関するリースマンの仮説を近代経済学の概念的 world に移して考えてみるなら、主観的価値論の創唱者たちが想定した経済行為の主体は、極大満足または極大収益の合理的方式を自己の行動の価値基準として内面化していたという意味で、『内的志向型』だったのに対して、ケインズ『一般理論』の社会心理的与件となった性格の型は『他人志向型』だったと解釈することができよう。」¹⁾

- 1) 武藤 [14] 261頁。本論文は、同書の第十章——近代経済学と「孤独な群衆」——から多大な示唆を受けている。なお、武藤氏は、同書の第九章——ケインズ「一般理論」と不安の心理——でケインズ理論をそれまでの経済理論から画する主要な特徴として不確実性を挙げておられる。経済学説史的にはこのことは全く正当である。しかしこの「不確実性」に由来する「不安の心理」が、何故ケインズによって特に主張されたのか。ケインズが「不確実」だと考えた事柄(武藤 [14] 235頁)は、ケインズ以前の社会にも起こっていたのではなからうか。このように考えると、「ケインズの『一般理論』は、ある意味では、このような他人志向型の人間の不安の心理が現代の経済社会にもたらす帰結を徹底的に追求しようとしたものと見ることができる。」(武藤 [14] 261頁)。そしてこのことは、次のように述べることができるかもしれない。

ケインズ思想には、「飢餓の恐怖」に駆られた「節約を美德」とする「内的志向型」の人間類型の社会から、「飢餓の恐怖から解放」され「消費を美德」とするところから形成される「他人志向型」の社会への移り変わりが反映されてい

るのではないかと。

本論文の冒頭にも述べたように、現代の人間類型を「他人志向型」として捉える観点から経済理論を再構築していくなれば、現代の諸々の関心事がより一層鮮明に浮び上がるかもしれないと期待している¹⁾。

- 1) それらには、例えば、「自由な競争」という信条から「公正な取引」という信条への関心の移行——これには、リースマンの述べた如く (Riesman [18] pp. 131—135, 加藤 [19] 119—122頁) 取引上の分野においてもそうであるが、所得分配の分野においても (それにも、国内的及び国際的両次元がある) 「自由」から「公正」への移行がみられる——、企業 (および経営者) の行動様式の変化、成長と公害の問題、消費 (および欲望) そのものを分析する本来の消費(者)理論、インフレ的偏向の原因等が挙げられよう。

覚 書 き

本論文の主張は、序において述べたので、ここでは、「階級」の問題と「経済人」の問題に触れる。ただこれらの問題は、私に残された今後の研究課題であるため、いまは、私の現在の立場を明らかにする程度の覚書きにすぎない。

社会的性格を論ずる点から「階級」の問題を眺めるならば、階級の「存在」は第二義的な関心であり、階級の「意識」が第一義的な意味をもってくる。例えば、階級が実際に存在したとしても、それぞれに独自の明確な階級意識が存在していたかどうかは疑問である。ロストウの引用をもってその一例とすれば、次のようである。

「それでマルクスは——そしてエンゲルスも——彼らの弁証法を実現させるためにあれほどあてにしていた工業労働者に対して、遂には幾分悟った考えをもつようになった。すなわち、労働者は、わずかでも一応規則的な進歩があれば、それに満足するのだということである。つまり労働者およびその子供にとって世の中がだんだんよくなっていくという気持、大体において彼は社会全体の仕組みの中で公平な分け前を得ているという気持、私有財産制の下における政治的民主主義の規制の範囲内で彼の欲するものを求めて闘おうとする気持、いわゆるいたるところで踏みつけにされた工業労働者という抽象的世界に自分

をなぞらえて考えるよりは、彼の属する国民社会の一員として自分を考えようとする傾向、紛争や不公平はあっても彼の仲間を殺そうと企むよりは共に生きていこうとのぞむ気持などである。」¹⁾

1) Rostow [23] pp. 158—159, 木村 [24] 214頁。

ある時代の社会的性格は、新興であった「階層」が時代と共に支配的になっていく過程で社会に衍敷されていく。リースマンの「考える性格類型を社会階層にあてはめてみるならば、内部志向というのは、『旧』中産階層——つまり、銀行家・商人・中小企業家・専門的技術者など——の典型的性格であり、一方他人志向型は、『新』中産階層——つまり、官僚・企業のサラリーマンなど——の典型的性格になりつつあるものだ、といてよいであろう。」¹⁾

このような意味で、「時代の社会的性格」とは、——マルクスの言い回しをすれば——つねに中産階層の社会的性格であるのかもしれない。

1) Riesman [18] p. 20, 加藤 [19] 16頁。

ところで、私の本来の研究目的は、伝統的経済理論で前提とされてきた「経済人」に対して、リースマンが描き上げた「他人志向型の人間」がどのような修正を迫まるか、ということである。

T・レヴィット (T. Levitt) は、同じような問題意識¹⁾の下でリースマンの「他人志向型の人間」を取り上げ論じたが、その結論は、「経済人」の概念は修正されることはない、ということであった。つまり、「かくして、経済人は、とりたてて言うほどの名誉でもないが、その本来の名誉を回復し……」²⁾、「……現代の経済学者の使うような意味での経済人の概念が廃物化するとか（中略）ということにはならない。」³⁾のである。

1) 「経済学者にとって重要な原型は内的志向型の人間と他人志向型の人間の二つである。前者は19世紀の経済人の概念の原型、つまり、打算的な消費者、智謀にたけた企業家、自立、活力、決断の人、経済進歩の担い手である。後者は歓迎の手グラッド・ハンドの原型、社会及び同輩集団の承認の職業的消費者、非生産的活動の王者である。そこで問題はこうである。この二つの見解は近代経済理論の観点から見て全く相容れないものであろうか。」(Levitt [15] p. 102, 安場 [16] 34頁。)

2) Levitt [15] p. 104, 安場 [16] 36頁。

3) Levitt [15] p.116, 安場 [16] 47頁。

レヴィットは、経済人の内容¹⁾を述べた後に、選択の理論を念頭において、他人志向型の人間にそれが充分適用され得るということをその理由としているのである。

1) レヴィットによれば、「人間は紙入れの観点から価値を眺める傾向があるということ、人間は諸々の効用の総体の極大化を求める傾向があるということ、資源ないしは手段の稀少が前提されている場合、人間は結局は何らかの形で経済原則に従って行動せざるをえないということ、これらが想定されたすべてのことであった。経済学の意図したのはこれだけのことであって、それ以上でもそれ以下でもない。」(Levitt [15] p.103, 安場 [16] 35頁)、ということである。なお、レヴィットは、文中、「経済原則」という言葉をしばしば用いているが、それがどのような性質を備えているのか、私には判然としない。

しかしながら、経済理論には、形式論理的な要素以外に何らかの社会心理学を基底とする部分がある。その意味では、選択の理論は形式論理的要素を多大に含む理論であると考えている。そして、もしそうであれば、それは、形式論理学である以上どのような分析においても適用可能性をもつ。レヴィットがその章題において述べている「方法論」としての枠内でのみ「他人志向型」を取り扱うならば、それは形式論理学の中に呑み込まれてしまう。しかしながら、「他人志向型の人間類型」という現象は、まさに社会心理学を基底とする経済学の分野に挑戦を投げかけているのである。そしてその挑戦を受け止めたところからこそ、また方法論的にもそれまでとは異なった手法が生まれてくるであろう、と推測している。

参 考 文 献

- [1] Fromm, E., "Individual and Social Origins of Neurosis," (*Personality in Nature, Society and Culture*, C. Kluckhohn and H. A. Murray, eds., Alfred A. Knopf N. Y. 1948).
- [2] Galbraith, J. K., *The Affluent Society* (3rd ed., revised), Houghton Mifflin Company Boston 1976.
- [3] 鈴木哲太郎訳『ゆたかな社会』(第三版) 岩波書店 1978年。
- [4] Keynes, J. M., *The Economic Consequences of the Peace*, (The Collected Writings of J. M. Keynes, Vol. II) Macmillan London 1971.

- [5] 早坂忠訳『平和の経済的帰結』（ケインズ全集第2巻）東洋経済新報社 昭和52年。
- [6] Keynes, J. M. *The General Theory of Employment, Interest and Money*, (The Collected Writings of J. M. Keynes, Vol. VII) Macmillan London 1973.
- [7] 塩野谷九十九訳『雇傭・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社 昭和16年。
- [8] Keynes, J. M., "Economic possibilities for our grandchildren," (*Essays in Persuasion*, The Collected Writings of J. M. Keynes, Vol. IX, Macmillan London 1972.)
- [9] 救仁郷繁訳「わが孫たちのための経済的可能性」（『ケインズ説得評論集』ペリカン社 1969年。』
- [10] マルクス・K., 『資本主義的生産に先行する諸形態』手島正毅訳 大月書店 1963年。
- [11] マルクス・K., 『経済学批判』杉本俊朗訳（改訳版）大月書店 1966年。
- [12] Mills, C. W., *White Collar — The American Middle Class*, Oxford UP. Oxford 1951.
- [13] 杉政孝訳『ホワイト・カラー』（第33版）東京創元社 昭和53年。
- [14] 武藤光郎『経済学史の哲学——経済哲学 I ——』創文社 昭和44年。
- [15] Levitt, T., "The Lonely Crowd and the Economic Man," *The Quarterly Journal of Economics*, Vol. LXX. No. 1, Feb. 1956, pp. 95—116.
- [16] 安場保吉訳「孤独なる群衆と経済人」アメリカーナ（通巻第10号）米国大使館文化交換局出版課 1956年7月, 27—47頁。
- [17] 大塚久雄『社会科学における人間』岩波書店 1977年。
- [18] Riesman, D., (in collaboration with N. Glazer and R. Denney), *The Lonely Crowd—A study of the changing American character*, Yale UP. New Haven 1961.
- [19] 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房 1964年。
- [20] 佐々木・鈴木・谷田部共訳『孤独なる群衆（1953年版）』みすず書房 昭和30年。
- [21] Robinson, J., *Economics — An Awkward Corner*, George Allen and Unwin London 1966.
- [22] 山田・米倉共訳『経済学の曲り角』新評論 1969年。
- [23] Rostow, W. W., *The Stages of Economic Growth — A non-communist manifesto* (2 ed ed.), Cambridge UP. Cambridge 1971.
- [24] 木村・久保・村上共訳『経済成長の諸段階——一つの非共産主義宣言』（増補

第2版) ダイヤモンド社 昭和54年。

- [25] シュムペーター, J. A., 『経済発展の理論』 塩野谷・中山・東畑共訳 (上・下) 岩波書店 1977年。
- [26] Schumpeter, J. A., *Capitalism, Socialism and Democracy* (3rd ed.), Haper & Row N. Y. 1975.
- [27] 中山・東畑共訳『資本主義・社会主義・民主主義』 (上・中・下) 東洋経済新報社 昭和37年。
- [28] 清水幾太郎『社会的人間論』 (再版) 創元社 昭和28年。
- [29] 清水幾太郎『倫理学ノート』 岩波書店 1972年。
- [30] ウェーバー, M., 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』 梶山・大塚共訳 (上・下) 岩波書店 (上) 昭和30年, (下) 昭和37年。
- (注) 原典がドイツ語のものについては, 筆者が解読できないため, 訳書のみを参照した。

——1980年10月2日記——